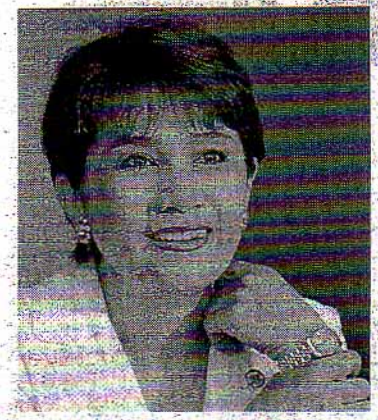
万博もフィナーレ間近ですね

「愛・地球博」広報プロデューサー マリ・クリスティーヌさん

日本の伝統の見直しに意義



〈プロフィル〉上智大学国際学部比較文化学科卒。94年東工大大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。近著に「お互い様のボランティア」（ユック舎）。

――万博もいよいよフィナーレですね

「今回は環境が大きなテーマだっただけに、3R（リデュース・リユース・リサイクル）を原則に、来場者は自分が帰るときは来たときよりもいい状態に、というエコツーリズム精神にあふれる万博でした。これまでの都市開発型の万博は、結果を残すことに腐心するあまり、跡地をニュータウン開発に充てるなど二十世紀の高度経済成長を背景としたものでしたが、その点が大きな違いといえるでしょう」

――たしかに環境に力点を置いた最先端技術の実証実験や展示が盛んでした

「長久手会場のグローバル・ループ（空中回廊）や、環境を重視した次世代新交通システムなどがその象徴でしたが、日本の最先端技術にはアナログやナチュラルさが、さりげなく隠れているのが特徴です。わたしは海外要人の案内担当も兼務していますが、どの要人も舌を巻いていましたね。地味だけど非常に面白い環境エネルギーの事例もいくつありました。たとえばラオス館。国際協力機構（JICA）と東京電力の共同プロジェクトで、山の上にタンクがあり、昼間は太陽光パネルでプールにたまった水をくみ上げたり、館内の電力の一部を賄う。夜はその水を上から下に流すエネルギーを活用して電気を起こす。このシステムは、電気のない開発途上国や離島で活用できるモデルになると思います」

――自身で一番気に入った風景は

「夕暮れ時、省エネ型の人工霧発生装置で霧がかかったひんやりとした風情の中、会場いっぱいに漂うヒノキの香り。海外の来場者も、最先端技術を使って五感に対応した繊細な雰囲気を演出する日本の文化の素晴らしさに感動していました。半面、経済発展を遂げた日本はモノを大事にしない国になりました。元来、四季をめでながら木の屋根で生活するスローライフ、スローフードは日本の文化の中にあったのに、現在はその素晴らしい文化をイタリアから輸入している矛盾があります。これからの社会は、自然や環境との共存が重要視される時代になるとあらためて感じました」

――広報プロデューサーの立場から、今回の万博を総括すると

「万博は諸外国、とくに開発途上国が未来の技術を体験し、自分の国に活用できるものはないか探し出す場であり、五年、十年後の社会を見ることができる場でもあると考えています。その意味で、愛・地球博は日本にとっては自らの歴史や伝統の素晴らしさを見直し、海外の国々にとっては日本の中に自分たちの未来を見つけ出す場であるといえます。そのような意味からも今回の愛・地球博は大きな意義があったと思います」

（斎木純一）

i.マイク